

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21320005

研究課題名(和文) 哲学と宗教の対話 ヘブライズム・キリスト教とヘレニズムの交錯

研究課題名(英文) The Dialogue between Philosophy and Religion

研究代表者

関根 清三 (Sekine, Seizo)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：90179341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円、(間接経費) 3,960,000円

研究成果の概要(和文)：平成21年から5年間にわたって、研究会による共同研究を推進すると共に、各自、その研究成果を内外に発表することに努めて来た。関根は旧新約聖書の哲学的含意を闡明し、その成果を国際学会で発表すると共に英文の著作 "Philosophical Interpretation of the Old Testament" として公刊した。三嶋はベッサリオンについての論考と共にプラトンについての英語の論文を発表した。出村はアウグスティヌスの「心」(cor)について研究を進め、国際学会で口頭発表すると共に、英語の論文を発表した。高橋はプラトンの神観念について『国家』と『法律』を中心に検討し、複数の論考を発表した。

研究成果の概要(英文)：All through five years of the project we attempted to promote our research into our topic both through the joint seminars held regularly and continuous individual works. We also tried to make our results open to public through presentations at the international conferences, publication of articles and books. Sekine clarified the philosophical implications of the Bible and recently published "Philosophical Interpretations of the Old Testament" in English. Mishima published several articles on Bessarion and an English article on Plato.

Demura investigated into Augustine's concept of cor and read papers at the international conferences and published English articles on the subject. Takahashi did research into the theological ideas of Plato mainly expressed in "the Republic" and "the Laws" and published several articles.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学と宗教 信と知 ギリシア 旧新約聖書 プラトン アウグスティヌス ベッサリオン

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 古代ユダヤ思想と古代ギリシア思想との比較研究としては、両者の相違を強調する Th・ポーマンの著作『ヘブライ人とギリシア人の思惟』があるが、研究代表者を務める関根自身は『倫理思想の源流』および『倫理の探索』においてむしろ両者に通底するものを探っている。2008年6月に上梓した『旧約聖書と哲学』では、これに加えて、「受難」に関する両者の思索・態度の対照を強調した。

(2) 哲学と宗教の対話、すなわち知と信をめぐる問題については、日本倫理学会大会のシンポジウムでの報告を集めた論文集『信と知』がヘブライズムとヘレニズムにおける信と知の問題のみならず、近現代哲学と日本倫理思想におけるその問題の展開を論じている。代表者の『旧約聖書と哲学』は、ユダヤ・キリスト教の伝統が現代において如何なる意味を持ちうるのかを、旧約学の方法を踏まえた精緻なテキスト読解に基づきつつ(文献的解釈学の実践)、古代から現代に至る哲学的思索との対話を通じて考察した(哲学的解釈学の実践)。これにより、「神なき時代」とも言われる現代においても、旧約の神理解は現代の倫理的諸問題の解決に示唆を与え、一神教理解を深めるものであることを明らかにした。

(3) 以上のような内外の研究状況を踏まえ、代表者のこれまでの研究成果を、他の専門分野の分担者との共同研究に開いて、より多角的に、かつまたより長期にわたる歴史的な文脈に置き直して再検討することで、現代における宗教の哲学的意義をより深く解明することが期待されると考えた。より多角的かつ歴史的な文脈について具体的に述べるならば、ユダヤ教を批判的に継承し、ギリシア哲学を受容しつつ対決することで独自の教義を樹立したキリスト教古代教父、東方世界に生まれたキリスト者でありつつ、ギリシアの伝統に沈潜した者、そして両者に通底する古代ギリシアの哲学者、という、三つの時代あるいは人物たちのことである。

それゆえ本研究は、代表者の古代ユダヤ教研究に基礎を置きつつ、古代教父思想の専門家(出村)、古代ギリシア哲学のその後の展開についての専門家(三嶋)、また古代ギリシア哲学の専門家(三嶋、高橋)といった研究分担者との連携において組織されている。

## 2. 研究の目的

(1) 古代ユダヤ思想における神観念とそれに基づく人間の宗教的心性・態度を明らかにすること。その際、現代的観点からは教条主義的・独善的に思われがちな旧約的信の在り方が、必ずしもそうではなく、むしろ現代へのメッセージを湛えたものであることを示す。もとよりこの課題は、関根がすでに遂行してきた研究課題であるが、今までの研究

成果をあるいはより深め、あるいはその欠を補うという仕方で、この研究課題を遂行する。

(2) 古代ギリシア哲学、とりわけソクラテスにおけるダイモニオン、プラトンの自動する魂と神との関わり、アリストテレスのエネルゲイアとしての神、などについて考察し、哲学という営みが、彼らの神観念といかなる仕方で関わっていたのかを明らかにする。主に高橋が、三嶋と協力しつつ、この課題を遂行する。

(3) 古代教父、とりわけアウグスティヌスにおける信と知のありようを明確にする。その際、この課題の遂行者である出村は、来年度中に刊行を予定している『アウグスティヌスの「心」の哲学』に結実する諸研究の一部を遂行し、かつまたそれらを発展させつつ研究を進める。アウグスティヌスにおいて「心」は信と知とが切り結びつつ宿る場であったからである。

(4) 15世紀に東方ギリシア世界に生まれ、後にローマ・カトリック教会の枢機卿となったバシリオス・ベッサリオンにおける哲学と宗教の対話の可能性を探る。ベッサリオンはアリストテレスの『形而上学』やクセノポンの『ソクラテスの思い出』などを訳したばかりでなく、当時のアリストテレス主義者と論争したプラトン主義者として著名であるので、本研究課題の適切なテスト・ケースと言える。この課題は三嶋が遂行する。

(5) 以上の、代表者と分担者の個別研究の成果を互いに照合することで、哲学と宗教の対話の可能性をめぐる思索についての各時代・各地域の特徴を浮かび上がらせる。その際、それぞれの時代の思想史的連関を明らかにすることを目指すとともに、そこで得られる知見が現代の倫理的諸問題に関してどのような示唆を与えるかという問題意識を常に持ちつつ、研究を遂行する。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、個人研究と共同研究の組み合わせによる。

(1) 研究代表者、および研究分担者の各人が、それぞれの担当分野におけるテキストの読解と二次文献の精査を基に、国内外の研究者との討論や資料収集などを通じて各自の見解を彫琢する。

(2) 研究発表会において、研究代表者および分担者の個別研究を相互の批判的な対論の中で検討する。その際、場合によっては内外のゲスト・スピーカーを交えることによって、より開かれた視点から各自の研究を検討する。

本研究は、この二つのフィードバックの中で遂行される。

#### 4. 研究成果

(1) 古代ユダヤ思想に関しては関根が以下のような成果を得た。

研究課題の「ヘブライズム・キリスト教」の宗教倫理を、「ヘレニズム」・ギリシアの実践哲学と「対話」する方法を用いて、西洋倫理思想の源流の系譜と本質を明らかにする著作『ギリシア・ヘブライの倫理思想』を纏めた。この著作はそれぞれの筋の通った概観を提供し、その上で両者を比較して、共通点・相違点を別括したものである。

編著『アブラハムのイサク献供物語 アケダー・アンソロジー』を上梓した。これはテキスト解釈と研究史を批判的に検討俯瞰したもので、宗教と哲学の対話について、ヘブライズム・キリスト教の典型的な例を纏めることができた。この書は分担者の高橋ら、本科研費の研究ネットワークと関わる共同作業の成果でもある。

2013年の夏にアテネで開催された国際哲学学会のシンポジウム「宗教と哲学」において発表し、宗教と哲学との間の批判的対話こそが、両者の意義・意味を豊かにすることを明らかにし、それを敷衍する英語の著作 *Philosophical Interpretations of the Old Testament* を出版した。本研究の国際的発信として銘記しておきたい。

(2) 古代ギリシア哲学に関しては高橋が、プラトンはその著『国家』において自由の概念を明らかにしたという自身の従来の研究に基づき、ポリスの経済と自由との関係を明らかにする成果をあげ、それを国際学会において発表した。またそれを踏まえて、プラトンの自由概念が最終的には哲学を始める自由に収斂することを明らかにした。また、その自由が『国家』以降の対話篇である『パイドロス』やプラトン最後の著作『法律』で展開されている「自らを動かす動」としての魂の定義と関わること、そして始める自由を有する魂で、善き魂に対しては、神は決して無関心ではないことをテキストに基づき跡付けた。

(3) アウグスティヌスに関しては出村が、アウグスティヌスがパウロ書簡解釈を通じて、神である知恵を愛する生き方としてのフィロソフィアを教会や修道生活という信仰共同体理解のまさに基本に据えていたことを跡付けた。また、アウグスティヌスの『イザヤ書』解釈にもとづき彼の「信仰と知」の問題を検討し、またマニ教論駁を背景とした彼のパウロ書簡の解釈に定位した「意志」や「恩恵」に関わる「心 cor」の神学の骨格と「哲学」との関係を追付けた。これらの成果

は出村の単著に収められ、さらにその後、「心」の概念の中国思想や日本の伝統思想、さらには日本のキリシタン思想における展開も明らかにした。

(4) ベッサリオンに関しては三嶋が、ベッサリオンの主著の精密な読解と彼の論敵だったゲオルギオス＝トラペズンティオスとの論争を正確に跡付け、文献学者としてのベッサリオンの意義について明らかにした。具体的には、ラファエロ『アテナイの学堂』の凶像の背後に潜む、15世紀イタリア・ルネッサンスにおけるプラトン、アリストテレスとキリスト教の関係をめぐる論争の思想的背景に光を当てる論考と、古典文献学に対してベッサリオンが果たした貢献をプラトン並びに新約聖書の校訂を中心に紹介する論考とを発表した。

(5) 本研究のような人文の古典研究が現代の倫理的・宗教的諸問題にいかなる意義があるのかという点に関しては、研究期間中に起こった東日本大震災によって、当初の計画以上に代表者・分担者ともに真剣に向き合うこととなった。それにより、代表者である関根は、講演や対談、論文を通じ、哲学と宗教の対話の一つの成果として、従来の哲学が宗教的な神を括弧に入れて 存在の所与性ばかりを語って来たが、実は 存在の所奪性への考察を補完しなければならないのではないかといった自省と提言を公けにしている。

また高橋は、若い世代に向けた一般書において、ソクラテスの「無知の自覚」と専門知としての科学技術との関係、さらに日常における哲学・倫理学の意義を明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計23件)

三嶋 輝夫、文献学者としてのベッサリオン、青山史学、査読無、32巻、2014、1-16

関根 清三、アケダーの真髄を尋ねて 旧約学と哲学の協働、旧約学雑誌、査読無、10巻、2013、89-131

三嶋 輝夫、ラファエロ・コード? 『アテナイの学堂』とベッサリオン vs ゲオルギオス＝トラペズンティオス論争、青山学院大学文学部紀要、査読無、54巻、2013、87-101

関根 清三、東日本大震災の問い掛けたもの 哲学・倫理学の視点から、東京都立西高等学校会報、査読無、46号、2012、16-17

関根 清三、内村鑑三の旧約読解と震災の年の日記、内村鑑三別冊環、査読無、18号、

2011、52-87

高橋 雅人、洞窟の中で 洞窟を超えて、理想、査読無、686号、2011、47-58

関根 清三、旧約聖書と哲学老死観編(上)、共生学、査読無、4号、2010、20-40

関根 清三、旧約聖書と哲学老死観編(下)、共生学、査読無、5号、2010、72-91

関根 清三、宗教と倫理の相剋の時代に、宗教研究、査読無、74巻361号、2009、191-213

〔学会発表〕(計23件)

関根 清三、アケダーの真髓を尋ねて 旧約学と哲学の協働、日本旧約学学会、2012年11月3日、東京大学

出村 和彦、意志の発見と心の発見-アウグスティヌス『自由意志論』から『告白録』へ、第11回岡山大学哲学倫理学会、2011年2月5日、岡山大学

関根 清三、キリスト教の決算その功罪を顧みると、桃山学院大学キリスト教講演会、2010年11月12日、桃山学院大学

関根 清三、日本の旧約学 学の回顧と学会の展望、日本旧約学会、2010年10月12日、同志社大学

出村 和彦、アウグスティヌスにおける教会と修道制、日本基督教学会東北支部会学術大会公開講演、2009年6月20日、仙台白百合女子大学

〔図書〕(計7件)

SKINE, Seizo, *Philosophical Interpretations of the Old Testament*, de Gruyter, 2014, 267

出村 和彦 他、知泉書館、中世における信仰と知、2013、482

関根 清三、日本キリスト教団出版局、アブラハムのイサク献供物語 アケダー・アンソロジー、2012、334

直江 清隆、高橋 雅人 他、岩波書店、岩波高校倫理からの哲学別巻 災害に向き合う、2012、296

出村 和彦、岡山大学文学部、アウグスティヌスの「心」の哲学:序説、2011、193

関根 清三、東京大学出版会、ギリシア・ヘブライの倫理思想、2011、xxiv+328+19

関根 清三、三嶋 輝夫 他、西洋哲学

の誕生、放送大学教育振興会、2010、224

〔その他〕  
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関根 清三 (SEKINE, Seizo)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号: 90179341

(2) 研究分担者

三嶋 輝夫 (MISHIMA, Teruo)  
青山学院大学・文学部・教授  
研究者番号: 80157479

出村 和彦 (DEMURA, Kazuhiko)  
岡山大学・社会文化科学研究科・教授  
研究者番号: 30237028

高橋 雅人 (TAKAHASHI, Masahito)  
神戸女学院大学・文学部・教授  
研究者番号: 90309427